

20

東京都現代美術館研究紀要

20

『吉阪隆正による著作・文献についての考察』

井波吉太郎

はじめに

吉阪隆正(1917～1980)は戦後日本を代表する建築家の一人である。一般的にはル・コルビュジェの日本人弟子の一人として知られており、塑像的なコンクリートの表現で社会に問う建築を提案し続けた。早稲田大学理工学部教授として教鞭を執る傍ら、大陸横断や最高峰への登攀に挑むなど探検家・登山家としても活動。また大学と別に、設計アトリエ「U研究室」を組織し、メンバーとの共同設計による建築物を次々と生み出していった。代表作に自邸(1955)、浦邸(1955)、ヴェネチア・ビエンナーレ日本館(1956)、日仏会館(1958)、江津市庁舎(1959)、アテネ・フランセ(1960)、大学セミナー・ハウス(1965)などがあり、「不連続統一体」「有形学」「発見的方法」といった独自の理論を展開した建築や都市計画を実践した。

2022年3月から開催を予定している「吉阪隆正展」にあたり、著作の書誌情報を可能な限り完全版とするべく詳細な文献調査を行っている。本稿はその著作・文献によって得られた吉阪の寄稿テーマ、言説内容、掲載媒体などから、各時代に何に興味を持ち、どのような思考をしてきたかの一端を考察するものである。吉阪は約40年間の活動の中で、論文・論考から随筆、翻訳まで幅広く文筆活動を展開。発表した媒体も様々で、その数は約1000本に達している。その旺盛な執筆意欲は年齢を経るにつれて加速し、専門とする建築学や都市研究を大きく超え、社会問題や歴史問題、文化批評などにも及んだ。本論は吉阪の活動に沿って、「1938-1945・戦前期」、「1945-1953・戦後復興と留学」、「1953-1957・吉阪研究室Ⅰ」、「1957-1963・吉阪研究室Ⅱ」、「1963-1971・U研究室Ⅰ」、「1971-1981・U研究室Ⅱ」と大きく6つの時代に分けて区切り、代表的な著書や著作に加えて、いくつかの特色ある文章を事例として紹介する。

既存の著作・文献リストについて

まず、これまでの吉阪隆正の著作・文献リストについての状況を整理したい。

初めてまとまった形式のリストが現れたのは『現代日本建築家全集15』^{註1}である。「吉阪隆正文献目録」として「論文・随筆」が230本、「対談・座談会・他」が15本、「著書・訳書」が18本、「吉阪隆正参考文献目録」として8本が収録されており、戦前から1970年までの情報が時系列で列記されている。

翌年刊行された『私、海が好きじゃない・吉阪隆正評論集』^{註2}

では、1955年から1970年までの期間に新聞や雑誌に掲載された随筆18本が再編されて再録された。

また『都市住宅1975年8月号』^{註3}では「特集発見的方法 吉阪研究室の哲学と手法その1」として一冊まるごと吉阪と吉阪研究室について重点的な特集が生まれ、巻末に「吉阪研究室研究論文・人名一覧1966→1975」として10年間分の論文など270本が掲載されている。論文は「A 修士論文・博士論文」、「B 研究室・企画案・コンペ」、「C 研究室・共同研究・個人論文」、「D 吉阪隆正論文」の4つに分類されており、この間の吉阪研究室の活動を研究するには重要な資料となっている。そのうち「D」では72本の著作が確認できるが、「A」から「C」までには、吉阪自筆ではない論文や、吉阪を含むグループでの共同研究・執筆の著作も含まれている。

没後に刊行された『建築文化1981年5月号』^{註4}では「吉阪隆正1917～1981 日々、ことば、すがた、かたち」として追悼特集が生まれ、吉阪の生涯を年譜として総覧する誌面構成となっており、その活動歴を「日々」「ことば」「姿・形」の3つに分類。「ことば」のパートで著作・文献が詳しく紹介されている。しかしながら、編集後記に「この特集は限られた時間のうちに行われた。とくに年譜における事柄の漏れ、誤り等が出る可能性は、編集作業を開始する当初より予測されていた。(中略)今後の「吉阪研究」をより完全なものとしていくためにはそれらは加筆、訂正されていくはずである。」とある通り、不備や誤記が多く確認され、不完全な情報にとどまっている。

1984年から1986年にかけて刊行された著作全集『吉阪隆正集』^{註5}では、吉阪の著作を全て集め、「生活論」「造形論」「集住論」「游行論」の4つに大分類し、各巻ごとに設けられたテーマでセレクションされ、全17巻に総計498本の文献と資料類が再録されるという大規模なものとなった。『吉阪隆正集』の構成について^{註6}には、「収集しえた原稿は、約500万字に及ぶ」とあり、「主要な著述を中心にほぼ三分の一に選択した」ようで、膨大な著述を整理したことを示唆している。掲載誌の閲覧や入手が困難な随筆や論考もあり、吉阪隆正を研究する上では必携の大変重要な書籍であるが、こちらも収集したすべての文献リストが付録されなかったため、その全容は不明瞭のままである。

2000年代に入って作られたと思われるウェブサイト『吉阪隆正研究』^{註7}では「全著作」というページがあり、1941年から1981年までの随筆・論文・著書・訳書が混在した形で掲載されているが、主要な著作約160本のみで「全」ではない。

なお、1998年に『DISCONT 不連続統一体／吉阪隆正+U研究

室』^{註8}が刊行され、吉阪隆正とU研究室による建築作品の全てを網羅したデータブックとなっているが、残念ながらこちらにも文献目録等は一切付録しておらず、没後40年を経た現在でも詳細まで網羅した著作・文献リストが作成・発表されていないこととなった。

新たな文献リストについて

前述のリスト全てに掲載頁数等の記載がない事や、情報の誤りなどが散見されたため、綿密な再調査が必要であると感じた。また、著作の全体を把握し、読了することは、対象となる人物の行動や思想を分析する上で必須の研究事項である。

作業としては、これまでの文献目録・再録を手掛かりとし、早稲田大学所有の吉阪資料に含まれている文献・論文リストや掲載記事のスクラップブックを参照しつつ、「国会図書館NDL」や「ざっさくプラス」といったオンライン書誌データベースを活用して掲載誌の書誌情報を取得した。そして、書籍の入手や図書館での実見を行って、ひとつひとつの掲載内容が確実であるかの確認を取っていった。

媒体への記述形態はさまざまで、自筆としても随筆・単著・共著・訳本・論文(共著を含む)があり、対談・インタビューなども多数存在している。また他筆によるものや紹介文など関連するものもあり、優先度は低いものの、手掛かりを得られたものは可能な限り調べ上げた。ただし、大学での講義録・草稿原稿・未発表原稿などまでを範囲とすると書誌情報との紐づけができないため、印刷物に掲載したもの以外は原則として除外することとした。

生い立ちについて

吉阪隆正は1917(大正6)年2月13日、農商務省に勤める吉阪俊蔵^{註9}と妻の花子の長男として東京市小石川区竹早町に生まれた。ちょうど第一次世界大戦の最中で、連合国への物資供給を担っていた日本は大戦景気の好況に沸いていた時代であった。戦争終結後の1921年、俊蔵が内務省社会局記者書記官に就任し、発足して間もない国際労働機関(ILO)の駐在員としてスイス・ジュネーブに赴任することとなった。俊蔵は一家での移住を決め、妻子連れ立って渡瑞した。隆正は3歳から6歳まで暮らした後に帰国し、日本の小学校で教育を受けたが、1929年に再び渡瑞。旧制中学にあたる5年間を同地のインターナショナル・スクール L'Ecole Internationale de Genève で過ごした。学校は国際連盟の関係者の為に設立された世界初のインターナショナル・スクールで、様々な国籍の生徒が集まる教育機関であった。学校での教育も独特であり、「一般教養という授業を担当したポール・デュブイという老先生がいた。この先生の授業はもっぱら地図を描くことだったが、限られた緯度経度の間に該当する部分を地図帖のあちこちから探し出して書くのである。こうして世界を一周も二周もする。生徒たちが大体一つの地図を書きあげ

た頃にその地域についての気候風土や文化歴史の話があった。国境線は描かない。生徒たちの所属国の利害にふれないためでもあった。地球上には随分とさまざまなところであって、いろいろな文明が栄えたり亡んだりしたこと、考え方や生活の違いの話は印象的であった。」^{註10}と述懐している。この時に学びを得た多文化教育や多国籍交流、コミュニケーション能力が後に世界を俯瞰して座視する視点や思想に発展していったことは間違いない。後述する「不連続統一体」への芽吹きは既にあつたと考えられ、「サイコロ地図」(図.1)、「魚眼マップ」(図.2)、「海洋世界地図」(図.3)として発表された独特な視点を持つ地図たちも、この時に習得した技術の一つである。吉阪にとって地図に表される世界は「人間の眼による直接の認識を、もっとも素直に表現している」とし「地図を描ければ自分の周囲についての認識を確かめられる。その描かれ方で世界観が示されるし、その表現は芸術ともなり得る。そこに記録されることは思い出であり、蓄積された業績を示す。ところで地図の枠は人に視点と視野を変えさせる。寸法のとり方によっては価値観の相異に影響する。」^{註10}と地図によるコミュニケーションの有用性を説いている。

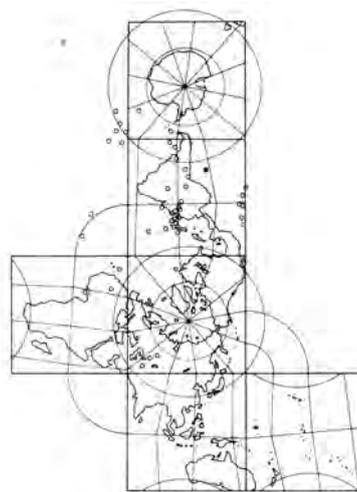


図.1 サイコロ地図

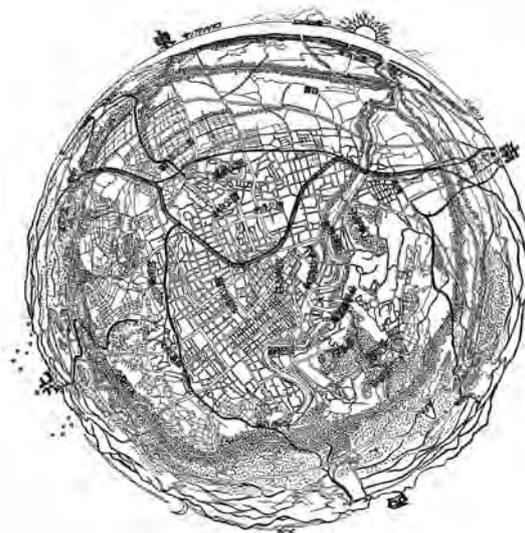


図.2 魚眼地図 (杜の都・仙台のすがた)



図3 世界海洋地図

またスイス時代、俊蔵に連れられてアルプスの山々に登ったことから(図4)登山の魅力に取りつかれ、生涯を通じて山行を続けた。自然に挑んでいく行動力は、調査団を指揮しての北アメリカ大陸、アフリカ大陸の横断などの探検にも発展。世界中を駆け回り、「日本を出入りした回数は45回にもおよび、合計15～16年分の日数」を海外で過ごした。地域としては「ヨーロッパ14回、中国7回、インド5回、その他アジア14回、オセアニア2回、中南米5回、北米9回、アフリカ2回と足を踏み入れて」^{註12}おり、ブラジル政府、ツクマン大学、シドニー大学、ハーバード大学への招聘や、CIAMをはじめとする国際会議への仕事の時でも、現地での歴史・民俗・住居・建築のフィールドワークを欠かさなかった。



図4 スイスアルプスで登山をする少年時代の吉阪

本論

1938-1945・戦前期

吉阪の随筆が初めて確認できるものは登山に関する事柄で、1938年に日本山岳会『会報』へ投稿した「モリス氏の話」^{註13}である。日本山岳会^{註14}は会員推薦制での入会となっており、1937年に関根吉郎^{註15}、鈴木正俊の推薦によって入会している^{註16}。早稲田大学第一高等学院から建築学科に進学し、本格的に建築に

ついて学び始めた時と重なるが、その後も「ヒマラヤ八千米級へ遠征隊を派遣するに到るまで」^{註17}「南アルプス縦走報告」^{註18}「ポーランド遠征隊の悲劇」^{註19}と続き、1940年の大学卒業論文までは建築に関わる著作は見られない。1年の半分以上を山行で過ごしたという吉阪の興味はもっぱら山と自然だったようである。

1939年に木村幸一郎^{註20}の誘いを受け、日本雪氷協会^{註21}設立に関わったことが、山と雪が建築的研究分野と結び着くきっかけとなった。

「私が雪に興味を感じたのはスキーや山登りが好きだったからだ。ちょうど私が建築を学び出した頃、日本に雪氷協会というものが設立された。私は木村幸一郎先生のお伴をしてこの会合に出席し、日本の国土の半分为毎年深い雪に閉ざされていること、その雪のことについてもっと科学的な研究が進められなければならないことを教えられた。」^{註22}

木村とは積雪に伴う建築への影響を実証実験するなど、雪害に強い建築についての研究と論文を発表してゆき、後に南極大陸での厳しい環境に耐えるプレファブ建築にまで発展する基礎研究となった。

大学では民俗学・民家研究者で考現学を提唱していた今和次郎^{註23}に師事。東北など積雪の多い農村地域でのフィールドワークや民家の調査に同行し、「住居学」や「生活学」の学びを得る。1940年7月～9月には今に代わって満州の東北部や内モンゴルへ住居調査に赴き、その成果をまとめて卒業論文『北支蒙疆に於ける住居の地理学的考察』を提出した。卒業後はそのまま助手として大学に残り、住居についての研究を継続しながら、今が教鞭を執っていた日本女子大学の生活学の授業を引き継ぐなど、教員としてのステップを踏んでいった。

吉阪は後年になって学生時代の記憶を辿りながら次のように述懐している。

「今教授流の造形へのアプローチは、(中略)考現学のときと同じような態度で、特に芸術的とされている造形のみを目を注がず、あらゆる造形物を、対等の気持で取上げ、そこにひそむ生活とのかかわり合いを拾い出そうとする。なぜそうしなければ気がすまないと思うのか知ろうとし、分析しているのである。逆にいえば、そのときどきに人びとの関心をそそる造形を通じて、その時代の文明批判をする結果ともなり、それが今日的なものときには、さらにあるべき姿の提案ともなってくるのである。」^{註24}

1942年には「自然環境と住居の形態」^{註25}を雑誌『探検』に投稿した。この論考が吉阪の戦前の思想を強く表しているといえるだろう。「天象儀を仰ぎ、地球儀を手にとって眺め、それから私は「人類の文化とはいったい何ものだろう。」と考えて見た。」という冒頭文は若干ポエティックではあるが、世界中の「原始民の住居」から住居の形態や生活様式を紹介し、近代以前の根源的な住居のあり方と社会文化について問いかけるもので、今から学んだ知見を活かした論考となっている。

同年8月15日、太平洋戦争の激化に伴い応召に応じ、日本各

地や中国の奉天、新京などを経て、終戦を朝鮮半島の光州(韓国)で迎えた。

1945-1953・戦後復興と留学

1945年11月に復員。早稲田大学専門部工科講師となったが、東京大空襲で新宿・百人町の自宅を失ったため、焼け跡にバラックを建て、貧しい生活からのスタートとなった。これまでの民家研究の実績を活かし、復興住宅についての著作や復興計画のコンペティションに応募するなどして住宅問題の改善に取り組んだ。

戦争体験について吉阪は具体的な著述を残していないが、「世界平和を祈ること今日より切なるはあるまい。ということは、それだけ世界は危機にさらされているということなのだ。一体その危機はどこにあるのだろうか。それを解除させる方法はないのだろうか。私はそのために何をなし得るだろうか。これらの問いが私を今日まで導いて来た。私が建築を自分の専門に選んだ理由もそこにあった。人々が相争うのは、お互いに相手を理解し信じ合えないからだと思え、理解させ信じさせるには実証するのが一番確かだ。建築はその国の、その時代の感情と知性と、即ち芸術と科学とを、物質を通じて一つの体系にまとめたものだと思います、国々のそれを、各人のそれを、かくかくと説明し感得させることによって理解と信頼のたすけとなるであろうと考えた。」²⁶と、戦争による犠牲の記憶と貧しい生活の中、世界平和のための建築家となることを宣言している。

その願いが届いたのか、1950年6月に戦後第1回目のフランス政府給付留学生に選出されることとなった。渡航費は自前で用意する必要があったため、前述の宣言を序文とした『住居学汎論』²⁷を出版することで渡航費を捻出したという。同年8月23日に離日、1ヶ月間の船旅を経て、9月25日にパリに到着する。賃料が安いパリ市の南にある日本学生会館^{28, 29}に居を構え、住居学やフランスの民家についての資料と理論を学びとることを目標に、博物館や図書館などへ通い詰め研究に没頭した。フランス語が堪能であったため、様々な人々との巡り合わせによってル・コルビュジエ³⁰に出会い、10月よりアトリエで働くこととなった。留学期間は1年の予定であったが、コルビュジエの要望で延長し、2年強の滞在となった。アトリエ在籍時には下記の9のプロジェクトなどに関わり³¹、作図や現場施工管理など通して設計手法を学んだ。

ロクとロブ

ラ・サント・ボーム

ストラスブルグの800戸のための競技設計

チャンディガール・高等法院

チャンディガール・カピトル

マルセイユ・ユニテ

サラバイ夫人邸

ジャウル邸

ナント・ルゼ・ユニテ

この間、建築の実務に専念した影響からか吉阪の著作は少なく、フランスや欧州で見知りしたことのレポートなどを建築雑誌や美術雑誌へ寄稿している程度である。

1951年夏、マルセイユ・ユニテへの現場出張の帰路、コルビュジエからの紹介状を得て、ヴァロリスのパブロ・ピカソ³²のアトリエを訪ねている。彫刻アトリエに陳列している作品を見て「椰子の枯葉が山羊の背中に化けたり、自転車のハンドルが牛の角に用いられたりしていて、連想のたくましさに驚いたのだった。」³³と感想を残している。

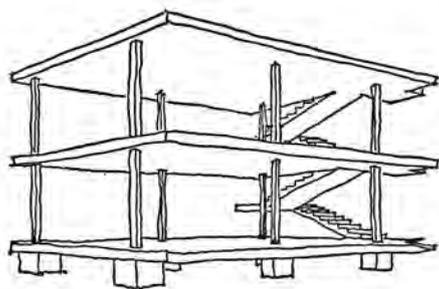
1952年10月14日に行われたマルセイユ・ユニテの落成を見届けた吉阪は、イタリア・ギリシャ・エジプト・シリア・イラク・パキスタンを経由し、インドでチャンディガールの建設現場を視察するなどして日本に帰国した。

1953-1957・吉阪研究室 I

帰国後の吉阪は体得した近代建築を実践するためにコンクリート建築を中心に設計に力を入れていく。実験住居として人工土地に挑み、コルビュジエのドミノシステム(Système Domino, 図.5)やピロティ(Pilotis)の要素を積極的に取り入れた「自邸」(1955, 図.6)、二つの正方形を組合せてピロティで持ち上げた形状の「浦邸」(1955)、そして無限発展の美術館(Musée à croissance illimitée)の思想を取り入れアレンジした「ヴェネチア・ビエンナーレ日本館」(1956)、一方で四角にすることから解放して塑像的な造形を目指した住宅「ヴィラ・クウクウ」(1956)など、次々と意欲的な建築物を手掛けていった。この頃の吉阪の建築は正方形が多用され、コルビュジエで学び得たことを実践し、形にしていこうという情熱が感じられる建築が多い。ただ晩年の吉阪はその正方形のフォルムについての意識が冷静になっており、「彼の絵、彫刻、建築の諸作品の中にそれをたずねて見ると、(中略)そこに繰り返し出て来るフォルムに正方形がある。正確な正方形でないまでも、正方形を想像させる形である。これは直角が最も豊かに表現されているフォルムではなかろうか。頭の中で心の中でどんな作用が働いたかは知らない。しかし正方形への愛着と直角への信頼とは無縁とはいえない。モデュロールの発展の契機も亦、正方形にあるのではないか。更に何故に彼が正方形を好むかについては、心理学者にでも聞く他にないかも知れない。正方形を好む性格の人が、どのように考えを進める傾向があるかがわかったとしたら彼の造形の根底がかなりはつきりするかも知れない。」³⁴と述べている。

1954年、「浦邸」を設計するときに吉阪のもとに集まったメンバー、大竹十一・城内哲彦・滝沢健児・松崎義徳の4人と共に、吉阪研究室を発足。場所は早稲田大学の校舎内に設けたが、大学の組織とは別のアトリエとして活動が始まった。丁度この時期、神武景気³⁵によって「もはや戦後ではない」³⁶と言われるほどに経済回復した日本社会は、テレビ放送の開始や大衆娯楽雑誌の相次ぐ創刊など、メディア文化の急速な発展をもたらした。吉阪も呼応するように活発な執筆活動を行うようになり、

1953～57年の5年間で約150本以上の著作が雑誌などに掲載された。『国際建築』『建築文化』『新建築』『建築界』といった建築雑誌をはじめ、『美術手帖』『藝術新潮』などの美術雑誌、『週刊朝日』『婦人之友』のような大衆紙まで広げ、建築や文化、社会



L'ossature standard "Dom-ino"
Pour erécution en grande série 1914

図.5 ドミノシステムの構造体透視図

についての論考や随筆を投稿していった。またコルビュジエの著書『Le Modulor』を『モデュロール(黄金尺)』^{註37}(1953)として翻訳、続けて『ル・コルビュジエ』^{註38}(1954)を出版し、その功績を日本で紹介することに尽力した。

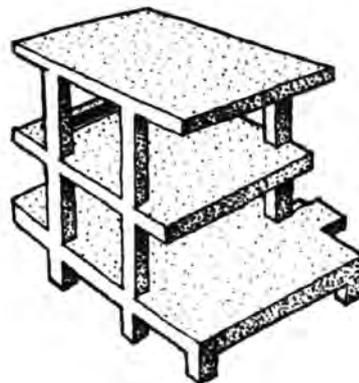


図.6 吉阪自邸の構造体透視図

1957-1963・吉阪研究室Ⅱ

この期間は早大アフリカ遠征隊赤道横断(1957)、ブラジル政府招聘講師(1958)、早大アラスカ・マッキンレー隊遠征(1960)、アルゼンチン・国立ツクマン大学招聘教授(1961～1962)、UIA大会出席キューバ・ハバナ(1963)など、吉阪の海外での活動が活発となった。研究室に不在の期間が長かったが、新たに鈴木恂や戸沼幸市ら3名がメンバーに加わり、「呉羽中学校」(1958)、「日仏会館」(1958)、「江津市庁舎」(1959)、「アテネ・フランセ」(1960)などの建築や設計・施工に当たった。執筆活動としては、1958～63年の6年間で約150本以上の著作が掲載されている。また単著として、自邸の建設過程について語った『ある住居』^{註39}(1960)と、学校建築についてまとめた『ある学校』^{註40}(1960)、アラスカ・マッキンレー遠征隊の記録集である『原始境から文明境へ』^{註41}(1961)、コルビュジエの『ル・モデュロールⅡ』^{註42}(1960)の翻訳出版をおこなった。

この頃から「不連続統一体」のコンセプトが出現し始める。吉阪研究室では「独立した意見を持った人間が集まって、とことんディスカスすることで全員が納得する方向を発見して行く創作の場をつくる」^{註43}ことに主眼が置かれており、一人一人の個性を最大限に発揮されることで、全体の調和が得られる組織作りを行い、共同設計による建築を実践していった(図.7)。



図.7 アトリエでのディスカッション (1963年)

1961年夏、吉阪研究室は早稲田大学から自邸のある新宿区百人町に移転する。吉阪がアルゼンチンのツクマン大学に招聘され、家族と共に赴任することから、空き家となった自邸を活用することになったのであった。

このアルゼンチンでの生活の中で「有形学」の発想が生まれている。有形学とは「人間の諸活動がある物質的な形をとってあらわれる、その相互関係はどうなのだ、どうしたらよくなるのか」^{註44}という問題意識に基づいたもので、「人間は住むために自己の周囲を自分の都合のいいように改変してきた。その人工化した世界の中でも、人々はまだ改造を行う。そこに何か法則が見出せるだろうか。その創造の端緒は発見にある。発見は着目を変えることに始まる。」「人間居住としてどのように歓びのある生活

をつくり上げるかを発見するためには、物の姿を通じて生活との絡み合いを知る必要が生じて、有形学をつくらせる」^{註45}と提起し、人間界と物質界とを調和した形で結びつける学問として有形学を唱えた。不連続統一体での関係性は主に個と組織であったが、有形学はさらに広範囲なものとなり、人間と環境の関係性の再定義にまで広がったのである。1962年11月、アルゼンチンから帰国した吉阪にさっそく「大学セミナー・ハウス」建設の依頼が舞い込んだ。不連続統一体と有形学を実践した建築づくりを目指す、8期20年にも及ぶこととなる大型プロジェクトが始動することとなった。

1963-1971・U研究室 I

1964年、アトリエ名としていた吉阪研究室を改称して「U研究室」を設立した。場所は変わらず百人町の吉阪自邸の敷地に置き、この期間には12名のメンバーが加わる。メンバーの中にはのちに「象設計集団」を結成する大竹康市、樋口裕康、富田玲子も含まれていた。

1966年、大学院の拡充と教育の再編が進められ、武基雄^{註46}と共に都市計画コースを担当することとなる。大学院には研究室が設置されたため、新たな吉阪研究室が誕生した。これはU研究室の前身の吉阪研究室とは別の組織であり、建築設計ではなく「都市の研究・実践」をテーマとした研究室となった。「大島元町復興計画」(1965)、「21世紀の日本国土設計」(1968)、「韓国集落調査」(1970)、「弘前市都市建設計画」(1969～71)、「杜の都・仙台のすがた」(1973)、「津軽地域の農村集落整備調査」(1973～74)、「東京まちのすがたの提案」(1974)など、東北を中心に各地の農村や都市の調査を手掛けた。

執筆活動としては、1964年～71年の8年間で約240本以上の著作が掲載され、戦前のコルビュジェの名著『Vers une architecture』を『建築をめざして』^{註47}(1967)として翻訳出版した。

1970年、高度経済成長を経た日本の集大成を示すかのように、日本万国博覧会が開催され、建築業界も大いに沸いた。吉阪は「日本万国博覧会協会本部ビル競技設計」のコンペ審査員や、日本館の展示物などに間接的に関わったが、この現代建築の祭典にもなった万博には参加しなかった。開会前日の関係者内覧会に招かれ、会場を訪れた吉阪は「いまの日本が終戦時の物的困窮状態から脱却したいといった一般の意志を、経済成長という形で努力し、そのためには技術の動員をと考え、このふたつに真しぐらに突込んできたのだが、いつの間にかそれだけが目標になってしまう反曲点を通過したように思われる。オリンピック位までは、そうしたお祭りのような刺激が有効な注射剤であったようだ。(中略)だが万博はそのオリンピックの成功の焼きなおしに過ぎない発想に思われてならない。同じ手段は2度目にはうまくいかないものだ。最初だけ、つねに創造的な時にだけ有効なのが本来の姿だと私は考える」「仕事を通じての国際交流は、万博入場者よりは大きな収穫だったかもしれない。そ

れ以外にはどうもあまり有効な効果は想像できない。近畿圏の環境整備にはどれだけ役立ったろうか。人びとの心の中までブルドーザがかきませただけではないのか。」^{註48}とその感想も冷ややかだった。

その時、吉阪は激化する学生運動の渦中に巻き込まれていた。1969～71年の間、大学の学部長の席に座ることとなり、その激化する騒乱状態の対処に労力を割くこととなる。学生たちと対話するために「告示」を頻繁に行い、組織という壁を撤廃し、人間として冷静に状況を説いた。時に漫画(図.8)を使ってまで学生の心を引き付けようと努力した。



図.8 告示に使用した漫画

「私は学部長をつとめて、その動揺の中で暗中模索しつつ、何らかの行動を起こしてきた。そしていくつかの告示を出したことが紛争のなかの一方だけの記録として、今残っている。それぞれの告示は、その時々的事件に対し対処して出されたが、その根底には私の人生観や世界観がある方向をとらせてきたといえる。」^{註49}

学生運動が終結後、3年間にも及んだ学生への告示をまとめて、「告示録」^{註50}として出版した。コミュニケーションも議論も、イデオロギーの支配下では円滑にできない事へ不安を抱いていた吉阪は「従来コミュニケーションの手段として“ことば”であるとか、“数字”であるとか、そういう“形”というものがあつた。コミュニケーションが出来ないということには、ある部分が全体へ普及していく事が出来ないので、そこで、このテクノロジー時代に、果たして何が全体へ届け伝える手段となるのか……私は、それは“形姿”じゃないかと思うんです。形姿を通じてコミュニケートすることが必要なのだ、と。現在、漫画が出て来たり絵言葉が出て来るのも、その一つの微われではないでしょうか。」^{註51}と新たな造形言語の必要性の示唆をしている。絵文字や動画による視覚的なコミュニケーションが隆盛している現在を予言していたかのような発言であり、その心理と共に興味深い記述を残している。

1971-1981・U研究室 II

この期間には8名のメンバーが新たにU研究室に加わった。

「大学セミナー・ハウス」のプロジェクトを進めながら、「山田牧場ヒュッテ」(1971)、「三沢邸」(1974)など、山小屋や住宅なども手掛け、並行して前述の吉阪研究室による農村・都市計画も重点的に取り組んでいる。

晩年も執筆は衰えなかった。1972～81年の10年間で150以上の媒体に約340本以上の著作が掲載、単著として『コンクリートの家』^{註52}(1971)、『21世紀の日本』上・下(1972)、『住居学』(1972)、『住まいの原型Ⅱ』^{註53}(1973)、『生活と私たち』^{註54}(1975)、自身についての回顧録である『告示録』(1972)と『私、海が好きじゃない』^{註55}(1973)、翻訳本『巨大なる過ち』^{註56}(1972)、『アテネ憲章』^{註57}(1976)など10冊を出版。また、1979年には2年かけて手掛けた「ル・コルビュジェ全作品集」の編訳を完遂し全8巻の刊行を終えた。図書についての紹介では「後年の作品集から先にとりかかり、次々と若かれし時代へ遡る順序を選んだ。(中略)いつ、その萌芽が育つのか、どんな風に発展していくのかを知るためには、逆読みの方が有効であることを知った。」^{註58}、コルビュジェの「人生をかけて全力投球した記録」と述べた。同時に吉阪も全力投球して手掛けたに違いない。

1980年12月17日、吉阪はガン性腹膜炎により急逝する。入院中は日に日に食事が困難となり、もともと細身の体はさらにやせ細っていったという。そんな中、最後に書きしたためた文が『フランス料理と食事の美学』^{註59}であった。フランスの戦前戦後に始まり、ルネサンス期、古代ローマと時を遡る。総括すると「食文化は大食主義から料理の内容や食事の装置へと発展する」^{註60}という内容であるが、社会情勢や食事の内容、風俗などを絡めて一人称でかかれた文体は、まるでその時代を体験してきたかのような書きぶりであり、食文化の源流をあらためて探る方法は生活学的視点である。

おわりに

ル・コルビュジェの名著で吉阪が翻訳出版した「モデュロール(黄金尺)」の序文には下記のような記述がある。

「建築」という語はここでは次の意味をさす：

家屋、宮殿ないし社寺、船舶、自動車、車輛、飛行機などを築く術。家庭または生産または交換に関する設備をすること。

新聞、雑誌または書籍の印刷の術。^{註61}

コルビュジェは建築に対して合理的で機能的な役割を与えるモデュロールの寸法体系を提唱するにあたって、戦前からの機械美の思想をもってこの意味を記したと考えられるが、彼にとって建築に欠かせない要素の一つに「新聞、雑誌または書籍の印刷の術」があるとも言え換えられるだろう。そう考えた時に、建築を設計する事と並行して著作や著書を生み出し続けた吉阪の姿勢は、コルビュジェから体得した「建築の術」の一つであったと解釈できるかもしれない。

今回はメディア等に発表されたものを拾い集めてまとめたが、おそらく今回の再搜索をもってしても吉阪の著作を全て網羅できるとは思えない。冒頭に述べた通り、草稿原稿や未発表原稿なども早稲田大学のアーカイブ^{註62}に収蔵されており、将来的にはそれらの分析も含めて完全体としての全著作が網羅できるものとする。今後の更なる研究が必要であり、その作業は将来現れることであろう吉阪研究者に委ねたい。なお、再調査した著作・文献リストに関しては展覧会図録に収録を予定している。

主な参考文献

『現代日本建築家全集15』、三一書房、1971年

『吉阪隆正集』全17巻、勁草書房、1984年～1986年

齊藤祐子『吉阪隆正の方法 浦邸1956』、住まいの図書館出版局、1994年

倉方俊輔『吉阪隆正とル・コルビュジェ』、王国社、2005年

「特集：今和次郎と吉阪隆正」『Ahaus No.6』、Ahaus編集部、2008年

アルキテクト編『好きなことをやらずにはいられない 吉阪隆正との対話』、建築技術、2015年

註

1. 栗田勇編著「現代日本建築家全集15 吉阪隆正 芦原義信」、三一書房、1971年
2. 「私、海が好きじゃない・吉阪隆正評論集」、アグネ、1972年
3. 『都市住宅』1975年8月号、鹿島出版会、1975年
4. 『建築文化』1981年5月号、彰国社、1981年
5. 『吉阪隆正集』全17巻、勁草書房、1984年～1986年
6. 吉阪隆正集編集委員会「『吉阪隆正集』の構成について」『吉阪隆正集』第1巻、勁草書房、1984年
7. 鈴木柊「全著作」『吉阪隆正研究』http://msuzuki-ams.com/3_yoshizaka/3-04/3-04.html (最終閲覧日：2020年12月20日)
8. アルキテクト編『DISCONT 不連続統一体／吉阪隆正＋U研究室』、丸善、1998年
9. 吉阪俊蔵(Shunzo Yosizaka,1889-1958)、大正～昭和時代の官僚
10. 「大学と国際交流 一個人的体験を通じて」『早稲田フォーラム』1978年11月、早稲田大学出版部
11. 吉阪隆正「地図論」『都市住宅』1975年8月号、鹿島出版会、p.14
12. 望月真一「後記」『吉阪隆正集 第6巻 世界の建築』、勁草書房、1986年、p.260
13. 「モリス氏の話」『山岳会「会報」』74号、1938年3月、日本山岳会、pp.4-6
※モリス氏とはジョン・モリスのことを指し、イギリスの登山家。1924,36年英国エベレスト隊員1938～43年外務省に外交文書作成要員として日本に滞在。
14. 日本山岳会は1905(明治38)年に設立された日本のアルパインクラブ。
15. 関根吉郎(Yoshiro Sekine,1915-1994)、早稲田大学名誉教授・登山家
16. 会報65号の新入会員欄に吉阪の名前が掲載されている。会員番号：1691
17. 吉阪隆正「ヒマラヤ八千米級へ遠征隊を派遣するに到るまで」『山岳会「会報」』83号、1939年1月、日本山岳会、pp.4-5
18. 吉阪隆正「南アルプス縦走報告」『リュックサク』八号-二、1939年、早稲田大学山岳部
19. 吉阪隆正「ポーランド遠征隊の悲劇」『山岳会「会報」』95号、1940年7月、日本山岳会、pp.4-5

20. 木村幸一郎(Koichiro Kimura,1896-1971)、早稲田大学名誉教・建築学者
21. 現在は日本雪氷学会。雪と氷およびその周辺環境に関する研究を行う学術団体。
22. 吉阪隆正「雪と私」『NHK南米向け放送草稿』、1979年6月22日
23. 今和次郎(Wajiro Kon,1888-1973)、民俗学研究者、早稲田大学名誉教授
24. 吉阪隆正「後記」『今和次郎集』第9巻造形論、ドメス出版、1972年
25. 吉阪隆正「自然環境と住居の形態」『探検』第1巻第2号、朋文堂、1942年
26. 吉阪隆正『住居学汎論』、相模書房、1950年10月
27. 同上
28. パリ国際大学都市日本館(薩摩館)のことを指す。
29. 同じ時期、画家の今井俊満、関口俊吾、田淵安一、金山康喜も住んでいたようで、今井の経歴には吉阪の名が記載されている。具体的な記述は双方見つからないが、何らかの交流があったものと思われる。
30. ル・コルビュジエ(Le Corbusier,1887-1965)、画家・建築家、本名はCharles Edouard Jeanneret
31. 福田京、島崎絵里、谷川大輔、山名善之「アトリエ・ル・コルビュジエにおける吉阪隆正のプロジェクト担当箇所の特定と考察」：設計図面及び日記の調査をとおして『日本建築学会学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』2008年、日本建築学会、pp.641-642
32. パブロ・ピカソ(Pablo Picasso,1881-1973)、画家
33. 吉阪隆正「ヴァロリスに訪ねて」『芸術生活』1977年3月号、芸術生活社、p.158
34. 吉阪隆正「ル・コルビュジエの造形について」『机』1955年1月、紀伊國屋書店、pp.10-12
35. 1954年(昭和29年)12月から1957年(昭和32年)6月までに発生した、朝鮮特需がもたらした好景気の通称。
36. 1956年(昭和31年)経済白書
37. ル・コルビュジエ著／吉阪隆正訳『モデュロール(黄金尺)』、美術出版社、1953年6月
38. 吉阪隆正『ル・コルビュジエ』、彰国社、1954年
39. 吉阪隆正『ある住居』、相模書房、1960年
40. 吉阪隆正『ある学校』、相模書房、1960年
41. 吉阪隆正『原始境から文明境へーアラスカ・カナダの旅ー』、相模書房、1961年11月
42. ル・コルビュジエ著／吉阪隆正訳『ル・モデュロール2』、美術出版社、1960年1月
43. 齊藤祐子『吉阪隆正の方法 浦邸1956』、住まいの図書館出版局、1994年12月、p.82
44. 吉阪隆正「中南米の教育」『吉阪隆正集』17巻、勁草書房、1985年8月、p.227
45. 吉阪隆正『生活とかたち：有形学(テレビ大学講座)』、旺文社、1980年8月、pp.11-13
46. 武基雄(Motoo Take,1910-2005)、建築家・早稲田大学名誉教授
47. ル・コルビュジエ著／吉阪隆正訳『建築をめざして』、鹿島出版会、1967年12月
48. 吉阪隆正「素通りした万博見学記」『新建築』1970年5月号、新建築社、pp.298-300
49. 吉阪隆正「序文」『告示録』、相模書房、1972年、p.2
50. 吉阪隆正『告示録』、相模書房、1972年
51. 吉阪隆正「都市構造と建築の情報伝達」『近代建築』1970年10月号、近代建築社、pp.53-56
52. 吉阪隆正+U研究室『コンクリートの家』、実業之日本社、1971年1月
53. 吉阪隆正『住まいの原型Ⅱ』、鹿島研究所出版会、1973年
54. 吉阪隆正『生活とかたち：有形学(テレビ大学講座)』、旺文社、1980年8月
55. 吉阪隆正『私、海が好きじゃない：吉阪隆正評論集』、アグネ出版、1973年7月
56. ミシェル・ラゴン著／吉阪隆正訳『巨大なる過ち』、紀伊國屋書店、1972年11月
57. ル・コルビュジエ著／吉阪隆正訳『アテネ憲章』、鹿島出版会、1976年
58. 吉阪隆正「ル・コルビュジエ全作品集1～8巻」『建築雑誌』Vol.93, No.1142, 1978年10月、日本建築学会、p.8
59. 吉阪隆正「フランス料理と食事の美学」『週刊朝日百科 世界の食べもの』、朝日新聞社、1981年
60. 白砂剛二「解説 住生活の観察からその解明へ」『吉阪隆正集 第2巻』、勁草書房、1986年、p.259
61. ル・コルビュジエ著／吉阪隆正訳『モデュロール(黄金尺)』、美術出版社、1953年6月、p.9
62. 吉阪隆正資料は早稲田大学が所蔵し、早稲田大学建築学教室本庄アーカイブスにて保管されている。

A Study of Writings and Literature by Takamasa Yosizaka

Yoshitaro, INAMI

For the upcoming exhibition (planned in 2021) of the architect Takamasa Yosizaka (1917-1980), I am conducting a detailed bibliographic survey to ensure that the bibliographic information of his work is as complete as possible. This piece examines the themes of Yosizaka's contributions, the content of his discourse, and the medium in which they were published, in order to understand what interested him and what his thinking was during each period. In his nearly forty years of activity, Yosizaka published close to 1000 pieces in a variety of media, from articles and essays to jottings and translations. His enthusiasm for writing accelerated as he grew older, exceeding the boundaries of his field of expertise in architecture and urban studies to address social and historical issues and cultural criticism. This article is divided into six periods according to his work: "1938-1945 Pre-war" "1945-1953 Post-war recovery and study abroad," "1953-1957

Atelier Yosizaka I," "1957-1963 Atelier Yosizaka II," "1963-1971 Atelier U I," and "1971-1981 Atelier U II." In addition to some of his representative books and works, it will also introduce some of his characteristic writings as case studies.

2020年度 東京都現代美術館年報
研究紀要 第23号

令和3年3月発行

編集・発行

公益財団法人 東京都歴史文化財団
東京都現代美術館

〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1

東京都現代美術館

電話03-5245-4111

製作

光写真印刷株式会社